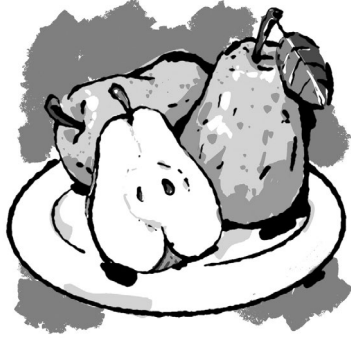


何かを決断するには、何かを捨てなければなりません。岐路で右を選ぶことは、左を捨てることであり、挑戦することは安定を手放すことです。本来の語源とは異なるかもしれませんが、「決断とは、決めて断つことである」と言われるのも頷けます。行動をためらう原因の多くは、「捨てる覚悟の欠如」にあります。「選択を誤れば地位や名誉を失う」と考えると、決断を躊躇してしまいます。また、「失敗すればお金がなくなる」と思うと、挑戦が怖くなるでしょう。執着する心は決心を鈍らせます。したがって、何かを得ようとするなら、まずは捨てる覚悟を決めることが重要です。例えば、一つの山を登り切り、そこで満足して留まってしまうと、更に高い他の山に登ることはできません。進歩や向上は、これまで持っていたものを手放すことから始まります。「得ては捨て、捨てては得る」の繰り返しによって、人は前進するのです。優柔不断な自分を変えたいと悩んでいたMさんは、そのことを先輩に相談しました。すると先輩は「身の回りの物を捨てる」と良い」とアドバイスをくれました。しかし、なぜ物を捨てるのと優柔不断が改善するのかMさんには理解できず、実行できませんでした。それを知った先輩は「捨てられないなら、まずはゴミ袋に入れるだけでも良い。まずはやってみることが大切だよ」とさらにアドバイスをくれました。Mさんはそれならできそうだと思い、実行に移しました。衣服や書類など、多くの物をゴミ袋に入



決断力向上の鍵は捨てることにあり

れましたが、Mさんにとってはどれも必要だと思える物ばかりで、やはり捨てる気にはなれませんでした。

ところが、約ひと月が経ったころ、Mさんは多くの物をゴミ袋に入れたままでも生活できていることに気が付きました。その現実を目の当たりにしたMさんは、それまでいかに自分が無駄に物を溜め込んでいたか、「これが無くては生活できない」という思い込みであったことを痛感し、処分する決心がつかしました。

それからは物をあつさりとして捨てられるようになったMさんは、徐々に優柔不断が解消されていきました。物を捨てるかどうかを迷いなく決められるようになり、その積み重ねが生活の中の決断力の向上につながったのでしよう。

倫理研究所の創設者・丸山敏雄は、著書の中で、次のように述べています。

持ち物をすっぱりと捨ててしまった心境、これは澄みきった正常の生活。そこには、その人を中心としての最も正常な環境が現われる。捨てた物をはるかに超えたよき状態が返ってくる。 『歓喜の人生』

捨てるものを決めるといふことは、残すものを決めることであり、本当に必要なものを明確にすることです。執着する心に基づく選択では、最善を望むことはできません。「何を捨てるか」ではなく「何を捨てるか」という観点で物事を見てみると、新たな気づきを得られるのかもしれない。「得るは捨てるにある」のです。